

レパントの海戦の総括についての考察

Regard sur la Bataille de Lépante

浜名 優美

Masami HAMANA

要旨

1571年のレパントの海戦に敗北したオスマン・トルコ帝国は翌年には海軍を再建し、1535年以来スペインの占領していたチュニスに1574年にオスマン帝国が攻略する。しかしその後ほぼ450年にわたりオスマン帝国は、1570年代のヨーロッパ側支配圏を拡大することはなかったし、アルジェリアを超えてスペインに侵入することもなかった。その意味では、レパントの海戦でヨーロッパ側はオスマン帝国によるヨーロッパ侵入を食い止めたのだと言える。

また1571年のレパントの海戦のキリスト教連合軍側の勝利は、現代になっても歴史ドキュメントなどのテレビ放送でキリスト教対イスラムの文明的対立が強調され、ヨーロッパ側の栄光の記憶として記録されがちであるが、トルコ側では国際関係の視点からはほとんど無視されているという特徴がある。

さらに言えば、レパントの海戦を境にして地中海地域ではその後大規模な衝突が起きなかったということは、キリスト教側にとってもイスラム側にとっても地中海が世界の経済・政治の中心ではなくなったということだ。

はじめに——問題の所在 「レパントの海戦」はどのように書かれているか

考察の契機としてのブローデルによる「レパントの海戦」総括

1971年10月にヴェネツィアでレパントの海戦から400年目を機にシンポジウムが開催された。その議事録として1974年にフィレンツェで出版されたフェルナン・ブローデルの「レパント——ある戦闘の総括」〔ブローデル 2004: 377-394〕は、1949年刊行の『地中海』におけるレパントの海戦の記述〔ブローデル 1991-1995: 231-444〕の繰り返しの部分とその後の研究を受けた1970年代の総括である。この論文について『ブローデル歴史集成』の編者は次のような解説を加えている。

「地中海の歴史をある日の午後のうちに一変させてしまったという、異例の短時間の出来事

の分析。とはいえ、トルコに対するキリスト教世界の予期せぬ華々しいこの勝利から人々がふつう想像する方向に向かう分析とは必ずしも一致しない分析である」[ブローデル 2004：377、下線部引用者]。

「地中海の歴史を（中略）一変させてしまった」「異例の短時間の出来事」とは、言うまでもなく、1571年10月7日のレパントの海戦のことであり、キリスト教連合軍とオスマン・トルコ帝国の戦闘ではキリスト教連合軍側が勝利を収めた（『ブローデル歴史集成』の編者は「予期せぬ華々しい勝利」と言っている）。この「予期せぬ華々しい勝利」、言い換えればトルコ側の敗戦が歴史のなかでどんな意味を持つと歴史家によって考えられているかを検証しようとするのが本稿の目的である。したがってレパントの海戦について書かれた歴史書において、ここではどのように書かれているかという記述を問題にする。言い換えれば、レパントの海戦の歴史的意義を歴史家がどのようにとらえているかということである。その検証にあたってはフェルナン・ブローデルの議論を念頭に置き、歴史の専門書よりも一般書や教科書でどのように扱われているかを調べることにする。ただし網羅的に調査することは不可能なので、比較的手に入りやすい文献、言い換えれば専門家でない人々が読む文献を中心に考察を進めることにする。またすべての言語を対象とすることも研究としては必要なことであることは承知のうえで、あえて日本語になった著作のなかから主要なものだけを取り上げることにする。主要なものとは言いながらも私の目配りには限界があることも言うておかなければならない。したがって欧文よりも和文の文献が多くなることをあらかじめ了解していただきたい。この海戦については塩野七生の『レパントの海戦』という歴史小説に実に詳しく書かれている。小説は史料を駆使して書かれているものの、フィクションの要素もかなりあるので、ここでは一応除外して参考程度にとどめることとする。

またレパントの海戦のみを主題としてイタリア語で出版され、のちにフランス語訳の出た Alessandro Barbero, *La Bataille des trois empires –Lépante, 1571-* [Barbero, 2012] のような研究書に近い物語風のものもここでは参考にするが、特に取り上げることはしない。

さらに最近では、インターネットの動画サイト YouTube で検索すれば、フランス、イタリア、スペインなどで制作されたテレビの歴史ドキュメントが多数見つかるが、ここでは書物を中心に扱うので、考察の対象外とする¹⁾。

問題設定の発端とするのはフェルナン・ブローデルによる『地中海』における記述と『ブローデル歴史集成』におけるレパントの海戦の総括である。「人々がふつう想像する方向に向かう分析とは必ずしも一致しない分析」がどのようなものかは後述のヴォルテール批判の箇所に触れる。

以上の問題設定からして必然的に引用が多くなることをあらかじめお断りしておきたい。要約ではなく、引用による比較こそがレパントの海戦の総括を浮かび上がらせることになるからである。

さて、以下に引用するのは、議論の出発点と考える上述のブローデル論文の冒頭である。やや長い引用になるが、のちの議論に深く関わるので省略せずに引用することにする。

1) いくつか代表的な例を挙げれば、Les Grandes Batailles du Passé: 1571 Lépante (ちなみにこの番組の解説者はフェルナン・ブローデルである)；La battaglia di Lepanto Part1-Part4; La Battaglia di Lepanto domenica 7 ottobre 1571; Battalla de Lepanto; Grandes Batallas, La Battalla de Lepante 2-4, mp4 など。

「すでにずいぶん前（1949年）に私が書いたように、「レパントの海戦は16世紀の地中海における最も華々しい軍事的な事件である」[ブローデル 1991-1995, IV-346]。それは巨大な炎であり、我々の目には400年の隔たりを経て今なお輝いているように見える。この炎は、16世紀に言われたように、「音を鳴り響かせるようなニュース」であり、途方もないショックであって、ヨーロッパのすべての神経系と、そのみならずオスマン帝国のすべての神経系を通じて、たちまち伝播した——この点に関しては何らの疑いもない。レパント湾において最低に見積もっても10万もの人間が衝突したが、これは当時の規模で言うなら、一つの大都市の人口に相当する。膨大な努力と困難を極めた動員があつてはじめてこんなに人が集まったのである。この点から明らかになるのはキリスト教世界とイスラム世界という二つの勢力、言い換えれば、ヴェネツィアとイタリアの補佐を受けたスペイン帝国と広大なトルコ帝国という二つの勢力である。

しかしながら、レパントの海戦は、歴史の連なりの中にあつては単なる「一事件」、すなわち一つの短時間の戦闘にすぎなかったし、今から振り返ってもそのことに変わりはない。戦いは1571年10月7日に始まり、その日が暮れる前に終了する。大きな問題は、とは言っても実のところそれに対する満足はゆく解答はないのだけれども、瞬間的なスペクタクルを長い歴史の流れの中に位置づけることであり、言い換えるなら、それに先行した出来事や、それを取り巻いていた大きなコンテキストや、それ以降に目に見えるようになった結果といったものを探り出すことである。アンリ・ピレンヌが言ったように、ある事件が大事件であるのかどうかは、それがどれだけの影響を残したか次第である。それゆえ、我々がこの途方もない戦いに関して示さなければならないのはその複雑な総括である——しかし、それはまともにくい総括であり、以下でお分かりになることだが、戦いの時点ごと、そしてその部分ごとの総括のそれぞれがまた異論の余地を持つものなのである」[ブローデル 2004:379-380, 下線部はいずれも引用者]。

ブローデルの言い方を繰り返すと、「レパントの海戦は、歴史の連なりの中にあつては単なる「一事件」、すなわち一つの短時間の戦闘にすぎなかった。」言い換えると、「瞬間的なスペクタクル」であつた。そしてピレンヌの考えを繰り返すと、「ある事件が大事件であるのかどうかは、それがどれだけの影響を残したか次第である。」

以上の2点を確認し、ブローデルの総括を受けたうえで、あえて屋上屋を架すかたちでこれから検討するレパントの海戦は、ブローデル自身が「まともにくい総括」であり、「部分ごとの総括のそれぞれがまた異論の余地を持つ」と述べているほど「複雑」なのである。まずこのことを確認しておきたい。

そしてレパントの海戦の「予想外の勝利」の説明としてブローデルは次の2点を挙げている。「キリスト教側の成功の理由としてまず挙げられるのは、出発の早すぎたトルコのガレー船が疲労していたこと、その装備も悪かったこと、そしてトルコの海兵隊が、火縄銃ではなく、まだ弓や投石器を使用していたことである。（中略）最も重要だったのはヴェネツィアのガレアス船の働きだったということ、私はほぼ確信している」[ブローデル 2004:388]。

ヴォルテールの評価

古くはヴォルテールがレパントの海戦に低い評価を与えていることが知られているし、ブローデルは「ヴォルテールがからかったように、キリスト教徒の大勝利であるレパントの海戦（1571年）

はいかなる影響も残さなかった」[ブローデル 1991-1995：IV-12，下線部引用者]と、『地中海』の中でヴォルテールの評価に言及している。またブローデルは上述の『ブローデル歴史集成』所収論文でヴォルテール批判を次のように述べている。「ヴォルテールの後を受けて、多くの歴史家たちは大胆にも、この途方もない戦闘は事実上成果のないものだったと断定してきた。私にはこのような断定はまったく間違っていると思われる」[同上：390]。

そこでヴォルテールの評価とはどのようなものであったのか確認することにしよう。

ヴォルテールがレバントの海戦について書いたのは『風俗試論』においてである。1878年刊行のヴォルテール全集第12巻451-454「第160章レバントの海戦について²⁾」がそれである。以下はその要旨である。

ヴェネツィアはキプロス島を失ってから相変わらずトルコと通商を続けているのだが、キリスト教世界に支援を頼み、わけてもピウス10世は「十字軍」精神からキリスト教世界の結集を呼びかける。ヴェネツィアとスペインを同盟に巻き込みたいと考える。フランスのシャルル9世、神聖ローマ帝国のマクシミリアン、ポルトガル国王ドン・セバスティアン、ポーランド国王シジモンド2世への呼びかけは失敗する。結局、ローマ教皇国、スペイン、ヴェネツィアで神聖同盟を結成し、対トルコの戦争の準備をする。

キリスト教連合軍の勢力について、ヴォルテールによると、ガレー船200隻、ガレアス船6隻、軍艦25隻、突撃用の船50隻で、戦闘員は5万人。マルタ島は3隻のガレー船を、ジェノヴァはトルコの「セリム2世よりもフェリペ2世を恐れて」ガレー船を1隻だけ提供した。キリスト教連合軍船団の総大将はドン・ファン・デ・アウストリア、教皇軍の指揮官はマルカントニオ・コロナ、ヴェネツィア軍を率いるのはセバスティアン・ヴェニエロ、そして船団の管理官はバルバリーゴ。対するトルコ側の大将は提督アリ。ガレー船は250隻。トルコのガレー船の漕ぎ手はキリスト教徒の奴隷、キリスト教連合軍のガレー船の漕ぎ手はトルコの奴隷という布陣である。

武器としては古い物も近代的な物もあるが、「弓矢、長い投げ槍、火槍、鈎付きの道具、大砲、マスケット銃、槍、そして剣」が使用される。

この「1571年10月3日³⁾」の戦いは「この種の戦いでは初めてキリスト教徒は華々しい勝利を勝ち取った。」トルコ側は150隻のガレー船を失い、死者の数はわからないほど多い（「15000人くらい」）。提督アリは戦闘中に「首をはねられた。」そして「5000人のキリスト教徒の奴隷が解放された。」以上はヴォルテールのほぼ4頁にわたるレバントの海戦の概要であるが、以下にこの戦闘についてのヴォルテールの評価を引用する。

「しかしレバントの海戦とチュニス征服の成果とは何であったのか。ヴェネツィア人はトルコ人からいかなる土地も手に入れることはなかったし、セリム2世の提督はチュニス王国を難なく取り戻した（1574年）。キリスト教徒はチュニスでは全員喉を掻き切られた。トルコ人はレバント海戦に勝利したようだった」[Voltaire: 454，下線部引用者]。

海戦としてはキリスト教連合軍側の勝利であったが、この海戦の結果についてはその後のチュニ

2) Voltaire, *Essai sur les moeurs et l'esprit des Nations*, in *Oeuvres Complètes de Voltaire*, 12, Nouvelle Edition, Garnier Frères, 1878, pp. 451-454. (ヴォルテール全集には各種あるが、ここでは南山大学図書館所蔵を使用する。)

3) 日付はヴォルテールの記述のまま。

ス攻略を考え合わせると、ヴォルテールの眼にはトルコ側の勝利と映ったのである。

ブローデル『地中海』のレパントの海戦の記述に依拠する見方

川勝平太，現代世界の淵源としてのレパントの海戦

川勝平太は『地中海』の概要を日本経済新聞⁴⁾で紹介した際に、この短い記事のなかで数回「レパントの海戦」に触れて次のように記している。まずは気候と戦争の関係に触れて、

「地中海は、夏はサハラ砂漠の乾燥の影響を受け、冬は大西洋からの雨の襲来に苦しめられる。殊に冬の三か月は厳しい。海は荒れ、戦争さえ休止を迫られる。そしてそれは、ヨーロッパがイスラム勢力をしのいで地中海の支配権を確立する契機となったレパントの海戦（1571年10月）がなぜ冬を避けるべく急がれたか、その事情を端的に物語る。

圧巻は、『海の地中海』だ。島々、海峡など海の個性が細密画のように描かれるが、照準はイタリア半島を堤防に見立てた西地中海と東地中海の違い、さらには戦争に合わされている。ブローデルは『この二つの地中海は、物理的にも、経済的にも、文化的にも異なる』とさりげなく述べながら、レパントの戦いを含む16世紀の大海戦が、この二つの海の境界周辺で繰り返された背景（東側で支配的だったイスラム側と西側で優勢なキリスト教勢力の相克など）に迫っているのである」[川勝 2007：22，下線部引用者]。

二番目には「宗教的情熱と戦争」の問題である。

「ブローデルは戦争を『文明』の枠組のなかで論じる。（中略）『平和的な文明は、同じくらい好戦的である。』

文明の働きとは、光を放ち支配することであるという。16世紀の地中海のキリスト教文明もイスラム文明も、世界を教育し、経緯や濃淡の差こそあれ近代文明の礎となった。その支配への道は戦争を伴い、これが付随的に都市、港湾の整備、技術革新などを促した。その意味で、戦争は文明の一形態なのだ。

16世紀地中海で戦争が頻発したのはなぜか。ブローデルの目は、宗教的情熱の行方に向かう。（中略）29年、オスマン帝国軍はウィーンを包囲する。その戦法は多数の騎兵を伴い突進する攻撃型であり、キリスト教圏は執拗な攻撃にさらされる。

キリスト教圏の長い防衛線要塞の連なりである。ここに、戦争が文明の一翼を担うことになる。格好の説明材料が見いだせる。要塞都市の建設と武器・物資の補給は、輸送法や土木・管理・会計など多様な技術の発展の基礎をもたらしただからだ。

一方、スペインのフェリペ2世の軍隊は500～600隻のガレー船、15万～20万もの兵を擁し、その移動はさながら『旅する町』であり、要塞の維持費用を含め軍への出費は膨大だっ

4) 日本経済新聞 2007年6月18日から27日まで8回連載（のちに『経済学 名著と現代』2章「ブローデル『地中海』」，日本経済新聞社，2007年に収録，引用は本書から）

た⁵⁾。(中略)

まさに「ジハード(聖戦)」を掲げるイスラム勢力を「十字軍(11-13世紀)」が攻めるイメージで、それが新旧キリスト教徒の宗教的情熱に火を付け、彼らの結束をよみがえらせた。そして急転直下、『出来事(戦争の展開など)』を扱う第3部のクライマックス(レバントの海戦)に突入していくのである。〔同上、26-27、下線部引用者〕

さて、そのレバントの海戦をブローデルおよび川勝平太が古い戦争と新しい戦争の「歴史の分水嶺」と見ていることは次のように説明される。

「フランスの思想家ボルテール(原文のママ)は、200年以上も前に『キリスト教側の(イスラム勢力に対する)大勝利であるレバント(ギリシャ)の海戦はいかなる影響も残さなかった』と述べた。ブローデルは『出来事とは本来、塵のごときのものである』と言り返し、どの塵を選ぶかは歴史家の意思次第であり、あえて、レバントの海戦を含む戦争にかかわる出来事を選ぶのである。

(中略)ブローデルは16世紀後半の海賊や略奪を含むあまたの戦いをつぶさに分析し、レバントの海戦こそ、それまでの古い戦争がそこに流れ込み、そこから新しい戦争が流れ出す結節点になったことを説得力ある筆致で描き出す。

では、どのような意味で、レバントの海戦は脈々たる歴史の一大分水嶺となったのか。それは、これよりのち、地中海から大戦争が消えた、という意味においてである。以後の主戦場は北のヨーロッパ大陸となり、西の大西洋となる。なぜ地中海から大戦争がなくなったのか。スペインもオスマン帝国も財政破綻に陥り、戦費に耐えられなくなったからである。ブローデルは、大戦争の衰退は地中海文明の衰退の予兆となった、と結論づけた。

(中略)戦争を軸にダイナミズムが論じられるところに、近現代に至るまで世界を牽引してきたヨーロッパ文明の、武力的な特質が垣間見える〔同上、28-29、下線部引用者〕。

このあとブローデルのレバントの海戦の記述が引用される。次の箇所だ。

「二つの艦隊は互いに相手を探し合い、10月7日の未明、レバント湾の入り口で出し抜けに出会った。……この衝突で、トルコ側は3万人以上の死傷者と、3000人の捕虜を出した。ガレー船の漕ぎ手として働いていた1万5000人の徒刑囚が解放された。キリスト教徒側は、10隻のガレー船を失い、死者は8000人、負傷者2万1000人を出した。戦場と化した海は、戦っている人々には、突如、人間の赤い血のように見えた」〔同上、30⁶⁾〕。

そして川勝平太は次のような長い射程の見方を示して、この紹介記事を次のように結んでいる。

5) すでに引用した『地中海』では、戦闘員の数に次の通りである。「レバント湾において最低に見積もっても10万もの人間が衝突した。」川勝の挙げる「フェリペ2世の軍隊は500~600隻のガレー船、15万~20万もの兵」という数字の根拠がどこにあるのかは不明である。フェリペ2世側の勢力としては多すぎるが、キリスト教連合軍とトルコの両軍合わせての数字なら概ね妥当かもしれない。

6) フェルナン・ブローデル『地中海』IV、373頁。

「こうして描かれる無数の個人や出来事から立ち現れるのは、(中略)キリスト教文明圏の拡大の歴史的ダイナミズムである。しかも、その射程は驚くほどに長い。『湾岸戦争もイラク戦争も、淵源はレパントの海戦にあり』と叫んでも、ブローデルは否定しないだろう」[同上, 31, 下線部引用者]。

レパントの海戦が現代にまで及ぶとの考えを明確に言い放った論者は川勝平太以外にはいないと思われるが、筆者はこの考え方に賛同しているからこそ、長々と引用したのである。

山内昌之とレパントの海戦の描写

山内昌之はブローデルの『地中海』についてその翻訳が出版されて以来、何度も関連記事または論文を書いているが、そのたびに「レパントの海戦」の記述が文学になっていることを強調しながらブローデルの文章を引用している。『歴史学の名著 30』(ちくま新書, 2007年)ではそれぞれ8頁で名著1冊を紹介する方法をとっている。その『地中海』の紹介では、「出来事と関連した歴史叙述」を「紹介に値する圧巻となっている」と述べて、あえて「レパントの海戦の意味」と題された一節でほぼ2頁を割いて次のように書いている。

「フェリペ2世は庶出の弟ドン・ファン・デ・アウストリアのガレー船団をメッシーナに送って、ヴェネツィアや教皇庁などキリスト教国の艦隊と合流させた。やがてオスマン海軍と対決するこの最高指揮官についてブローデルは次のように描いている。

『ドン・ファンは人当たりがよく、相手に好感を抱かせるすべを心得ていた。この魅力的な人物は相手に惜しみなく厚情を示した。ドン・ファンの情熱を賭けたこの遠征の成りゆきはおそらくこの最初の出会いに左右されるだろう。ドン・ファンの行動には雑多な寄せ集めである海軍を統一のとれた全体に変える力があつた。(中略)艦隊の各部隊は、百パーセントひとつに混ざり合ったわけではないが、それでも互いに船を取り替えることができる状態にあり、艦隊に出撃命令が下るや、実際に互いに船を取り替えたのである。同盟評議会が招集されると、艦隊自体も、一人の最高責任者を戴いたのだという自覚を持った。すべての暗雲が一挙に晴れたわけではないにせよ、しかし、不協和音は小さくなっていった。』

こうして208隻を率いたドン・ファンは、戦艦230隻のオスマン艦隊をエーゲ海の西レパント湾の内部に封じ込め、不利が予想された海戦に勝利した。オスマン側は3万人以上の死傷者を出したとはいえ、キリスト教徒側も死者8000人と負傷者2万1000人を出したのであつた。ブローデルは、『戦場と化した海は、戦っている人々には、突如、人間の赤い血のように見えた』と描写した。彼はこの海戦の意味も的確に表現している。

『しかし、レパント以後にだけ注意を払うのではなく、レパント以前に注意を払うなら、あの勝利はある悲惨の終わりとして見えてくる。つまり、キリスト教世界の現実的な劣等感に終止符が打たれ、それに劣らず現実的なトルコの優位が終わりを告げたと見えてくる。キリスト教国側の勝利は、非常に暗くなりそうな未来への道を遮断したのだ。ドン・ファンの艦隊が敗れていたら——これはあり得ないことではなかった——、ナポリ、シチリア島がおそらく攻撃され、[ムスリムの]アルジェ人は[かつてイスラムが支配していた]グラナダの火をふたたび煽ろうとするか、バレンシアへ飛び火させようとしたことだろう。ヴォルテールに倣ってレパントの海戦に皮肉を投げかける前に、この事件の直接的な重みを測ってみるのが、たぶん、

まともというものだ。それは非常に重かったのである。』

これはもはや、トゥキディデスをして顔色なからしめる立派な政治史の叙述になっている」
[山内 2007: 92-94, 下線部引用者]。

『地中海』紹介の4分の1を「レバントの海戦」に割いているということだけを見ても、山内がブローデルによるレバントの海戦の記述を重視していることがわかる。レバントの海戦そのものの総括については、名著紹介という性質も手伝って、ブローデルの文章そのものの引用である。そして「海戦の意味も的確に表現している」と評価している（下線部引用者）が、「的確に」の中身がブローデルの記述以上には踏み込んで書かれているわけではない。

また同じ山内昌之は「やさしい経済学 危機・先人に学ぶ——ブローデル」日本経済新聞（2012年7月2日から9回連載）においても『地中海』を中心に、私の「グローバルな思想家⁷⁾」という考えを援用しながらブローデルを紹介しているが、そこではレバントの海戦には言及していない。

ブローデルの記述を参照している可能性のある文献

おそらくブローデルの『地中海』の記述を読んだあとで書かれたと思われる次のような紹介の仕方は、実は数多くないのである（しかしここで注意しておかなければならないのは、次の文の筆者はブローデルを引用しているわけではないということだ）。草光俊雄、河原温『ヨーロッパの歴史と文化—中世から近代』を読んでみることにしよう。

「フェリペ2世のスペインは、16世紀のヨーロッパ史の中でも目を瞠るような出来事に満ちている。イングランドとの抗争は1588年の無敵艦隊（アルマダ）の敗北でその後のヨーロッパでのスペインの地位の衰退を思わせるが、オスマン・トルコとの軋轢の中で起きたレバントの海戦（1571）での勝利は、地中海におけるトルコとヨーロッパ勢力とのバランス・オブ・パワーを逆転させ、一時的といえどもヨーロッパをトルコ＝イスラムの侵入からくい止めることとなった。オランダのスペインからの独立もフェリペの時代であった（正式の独立が認められるのは17世紀の半ば、30年戦争後のウェストファリア条約でのことであるが）。この時代のスペインの活躍は中南米からの富の流入が一役買っていたことは間違いない。16世紀のヨーロッパ政治は海洋帝国建設と密接にかかわっていたのである」[草光、河原 2009: 142]。

下線部はブローデルの記述を思い出させる箇所である。おそらくこの文の筆者は河原温であり、河原温は『現代歴史学の名著』（樺山紘一編、中公新書、1989年）でブローデルの『地中海』紹介文を書いた人であるから、『地中海』の記述を念頭に置いてこの文を執筆したと推測される。

『現代歴史学の名著』で河原温は『地中海』を紹介する際にレバントの海戦については次のように書いている。

7) 浜名優美「グローバルな思想家としてのブローデル」『ブローデル『地中海』入門』藤原書店、2000年、223頁以降。

「ブローデルにとって、レバントの海戦（1570年）（原文のママ）といった歴史上の個々の事件は、煙やほこりのようにはかないものであり、それ自体歴史学の主題たりえない。彼がめざすのは、個人や個別の事件を超えて現実の社会的事象や人々の運命に作用した非人間的な力を明らかにすることなのである。すなわち16世紀地中海世界の歴史において真の主演は、フェリペ2世をはじめとする英雄ではなく、彼らの運命―生と死―を左右し、彼らをその歴史的世界に定着させた地中海を中心とする自然環境なのである」[樺山 1989：136-137, 下線部引用者]。

これはブローデル以前の歴史学が事件史を重く見ていたことを受けて、ブローデルの歴史学が「構造」に重きを置いていることを強調している部分であり、その意味ではレバントの海戦も一時的な出来事、ほこりのようなものということになる。しかしのちにブローデル自身が述べるように、ブローデルは「出来事の敵ではない⁸⁾」。実際、ここで問題にしているレバントの海戦について戦争に至る経緯とその後についてブローデルはかなり多くの頁を費やしているのだ⁹⁾。また細部に関する記述の仕方は、山内昌之が賞賛しているように、ほとんど文学と言ってもよいほどなのだ。

これほど歴史上意義のあるものと考えられるこの「レバントの海戦」について、現在までにどのように書かれてきたのかを明らかにするのが本論文のねらいであることを改めて繰り返しておく。

戦史におけるレバントの海戦の扱い

ジェフリー・リーガン『決戦の世界史』

ジェフリー・リーガン『決戦の世界史』（原書房、2008年）は「歴史を動かした50の戦い」を取り上げているので、レバントの海戦についても戦闘の様子が詳しく書かれている。しかし私の考察の目的は戦闘そのものの描写にはないので、戦いの様子にはここでは触れない。むしろ海戦の背景とその後に関する記述のみに注目しておきたい。とはいえ、オスマン帝国軍と神聖同盟軍の戦力については、本書による船の数と兵力を記しておく。オスマン帝国軍のガレー船は210隻、ガリオット船42隻、小型船8隻、海兵2万5000人、神聖同盟軍のガレー船は152隻、ガレアス船6隻、快速帆船70隻、海兵2万8000人となっている¹⁰⁾。ここでトルコ側になく神聖同盟軍にあるガレアス船に注目しておきたい。ブローデルが述べたように、ガレアス船こそ戦闘の勝因なのだ。

海戦の背景については、次のような解説が書かれている。

「1453年のコンスタンティノープル陥落後、オスマン帝国は地中海の支配権拡大を狙って海軍の増強を図った。16世紀には地中海東部と北アフリカ沿岸の覇権を握った。（中略）オスマン帝国に対抗するにはキリスト教諸国が団結するしかなかったが、ヨーロッパでは王位継承争いや宗教上の摩擦により、団結は望めそうになかった。（中略）1566年のスレイマン大帝の死

8) フェルナン・ブローデル

9) フェルナン・ブローデル『地中海』IV、「第3章 神聖同盟の始まり」から「第4章 レバントの海戦」まで。

10) ジェフリー・リーガン『決戦の世界史』、原書房、2008年、193頁の囲み記事による。

は、オスマン帝国の歴史のみならず、ヨーロッパ全体の転機となった。(中略) すったもんだの末、教皇、ヴェネツィア、スペイン王フェリペ2世らは、イタリアの小国や十字軍を唱える聖ヨハネ騎士団とともに神聖同盟を結成し、船300隻と兵士5万人を動員した」[リーガン 2008: 193-194]。

こうしてヴェネツィアの支配していたキプロス島のファマグスタの要塞がオスマン帝国に攻め落とされたことがきっかけとなって、キリスト教徒側は結束したのである。上の記述で兵士5万人とあるが、前述の記録では海兵2万8000人である。船の数300隻についても、上の記録とは齟齬がある。本文の説明では「同盟軍の船は総数272隻、えり抜きの戦士2万8000人」[同上, 196]と書かれている。そのことは「オスマン艦隊274隻」, 「兵士2万5000人」という記述も本書の記録(193頁)とは齟齬がある。著者自身にとってもどの数が正確なのかはわからないと言っておくしかあるまい。

戦闘の結果、「神聖同盟軍の死者は7500人(中略)、ヨハネ騎士団の60人は(中略)死んだ。オスマン軍の被害も甚大だった。ガレー船15隻が沈没し、190人が捕虜となった。アリ・パシャとともに死んだり(原文のママ)溺れ死んだ者は3万人。そして、ガレー船の奴隷だった1万2000人のキリスト教徒が戦いの後に自由の身になった(中略)。レパントの海戦はオスマン帝国への影響よりもキリスト教徒に及ぼした影響の方が大きかった。オスマン帝国は艦隊を再建して再び地中海周辺を脅かしたが、昔日の勢いはなかった。オスマン帝国は繁栄の頂点を過ぎ、腐敗と悪徳に染まったスルタンの支配の下で次第に衰退していく」[同上, 201]。

本書では、キリスト教側への影響が大きかったと述べているものの、それがどのようなものであったかは詳しく書かれていない。強調されているのは、オスマン帝国は直ちに艦隊を再建して相変わらず地中海を脅かしたが、その力が衰えていったことである。

海戦そのものを主題とした世界戦史研究会『海戦』(新紀元社, 2011年)は「ガレー船時代の海戦」の最後にレパントの海戦を取り上げている。「オスマン帝国の脅威に再びローマ教皇が立つ」という見出しで、「16世紀はオスマン帝国の黄金時代であった」という記述から解説が始まる。背景に関する説明は次のように続く。「コンスタンティノーブルの戦い[1453年]で東ローマ帝国を滅ぼしたオスマン帝国はその後、北アフリカまで進出し、ヨーロッパ諸国を震え上がらせた。だが、プレヴェザの海戦に勝利し東地中海の制海権を奪ってさらなる西進を目指すオスマン帝国の野望を打ち砕いたのが、レパントの海戦であった」[世界戦史研究会 2011: 86]。

この後、海戦の様子が詳しく記述されるが、「連合軍の勝因は、オスマン帝国軍がもちえなかったガレアス船の開発にいち早く成功したことにあった」と結論づけている¹¹⁾。それまで主流であったガレー船よりも喫水が高く大型で大砲を甲板に備えたガレアス船は動きが鈍いが離れたところから相手を攻撃できる利点があったのである。

レパントの海戦の後、「1573年には連合軍の旗頭であった教皇ピウス5世が逝去し、ベネチア(原文のママ)はレパントの海戦のきっかけでもあったキプロス島の領有権を放棄してオスマン帝国と和平を結ぶに至り、連合軍はそれ以上オスマン帝国を追い詰めることができなかった。そのため大打撃を被ったオスマン帝国にとどめをさすことができず、その後の復興を許してしまい、地中海の制海権の力関係は以前とほぼ変わらなかった。

11) これはブローデルの見解と一致している。

だが、無敵と恐れられたオスマン帝国艦隊をほぼ壊滅に追いやった事実は、ヨーロッパ各国に自信と名誉を回復させ、以降の歴史に与えた精神的効果は大きかった。」[同上，91，下線部引用者] ヴェネツィアがトルコと和平協定を結んだことがキリスト教連合軍側がトルコをさらに追い詰めることができなかつたとの説明になっているが、スペインが地中海よりも北ヨーロッパと大西洋に軍事力を割かなければならない状況になっていたことも付け加えるべきではないだろうか。「地中海の制海権の力関係は以前とほぼ変わらなかつた」という状況は、トルコがヨーロッパ側に進出できなかったということを指している。その後、ほぼ450年にわたってトルコのヨーロッパ側の支配地域は変わらなかつたということである。そして本書では「精神的効果が大きかった」ことを強調しているが、これはブローデルの言う「キリスト教国側の勝利は、非常に暗くなりそうな未来への道を遮断した」[ブローデル 1991-1995：IV-375]という説明につながるものである。

クリステル・ヨルゲンセンほか著の『戦闘技術の歴史 3 近世編』（創元社，2010年）では「第5章 海戦」のなかでレパントの海戦はかなり詳しく解説されている¹²⁾。

スペイン、教皇庁、ヴェネツィアからなる同盟軍の兵力については、「兵員は約7万4000、軍船は軽量のネフ船から、この戦いの勝敗を決することになる6隻の巨大艦船¹³⁾まで、合わせて約240隻を数えた。トルコ軍艦隊は軍船が約210隻、兵員は総計7万5000であった。」[ヨルゲンセン 2010：321]

戦闘技術に関する書物なので、戦闘について詳しいが、本稿の関心のある戦争の総括についての説明を読むと、次の解説が見られる。「この戦いの最大の成果は、おそらく人心にもたらした影響だろう。トルコ艦隊の船の大半を破壊あるいは捕獲するというキリスト教徒側の圧倒的勝利によって、トルコ軍不敗神話に終止符が打たれたのである」[同上，326，下線部引用者]。この一文はレパントの海戦の図版の説明として書かれているのだが、一方、本文には「今日では、きわめて合理的な理由から、この大規模な戦いには重要性を認めないとするのが趨勢である」[同上，330，下線部引用者]との記述が見られる。しかしながら解説の最後の文は次のとおり西洋の軍事的優位を強調している。「だが、勢力の頂点にあったトルコ軍が、キリスト教国の一部にすぎない同盟軍に敗れたという事実は文明世界を驚かせ、西洋の軍事力は概してイスラム国家に勝るという見方が、今なお残る原因ともなっている。」[同上] このあとの検証でもわかるように、ヨーロッパ側の立場から歴史を書く者のほとんどは、この西洋の軍事力の優位というヨルゲンセンの見解を共有していると言える。

一般書やインターネット上の概説での扱われ方

歴史的転換点

たとえばインターネット上の世界史の記述ではレパントの海戦は歴史的転換点として捉えられている。

12) クリステル・ヨルゲンセンほか著、浅野明監修『戦闘技術の歴史 3 近世編』、創元社、2010年、317-330頁。

13) ガレアス船のこと。「秘密兵器—ガレアス船」との記述がある（ヨルゲンセン 2010：324）。

「フェリペ2世は、1571年にはスペイン・ローマ教皇・ヴェネツィア連合艦隊でオスマン＝トルコ海軍をレバント（ギリシアのコリント湾）の海戦で破って地中海の覇権をトルコから奪い、新大陸から流入する膨大な金・銀とあいまってスペインの全盛時代を現出した。」[絶対主義国家の盛衰 2 スペインの強盛 <http://www3.kct.ne.jp/~atonoyota/kindai/16-zettai2.html>]¹⁴⁾

この記述には10月7日の日付はない。「地中海の覇権をトルコから奪い」という記述は、それまで地中海の覇権がトルコにあったという前提に立っているが、トルコとスペインの軍事的な力関係から見る限り、両者はほぼ拮抗していたという方が正しいと思われる。「新大陸から流入する膨大な金・銀」とあるが、正確には「銀」が南米からスペインに大量に流入したのである。

次に、今や不明なことがあればほとんどの人が最初に検索するウィキペディアというインターネット上の百科事典の「レバントの海戦」を読んでみよう。そこにはまず次のような注意書きが書かれている。

「この記事は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。
出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。(2012年2月)」(強調は原文のママ)

ウィキペディアの「信頼性」は常に問題であることを踏まえたうえで、引用してみる。「カトリック教国軍：スペイン王国（ナポリ、サヴォイア公国、マルタ騎士団）、ヴェネツィア共和国、教皇、ジェノヴァ共和国」対「オスマン帝国軍」の戦いであることが明記されている。多くの著作でキリスト教連合軍と書かれているが、カトリック教国軍のなかにナポリ、サヴォイア公国、マルタ騎士団、ジェノヴァ共和国を明示することは実は多くないのである。かなり詳しい記述となっていることに注目しておきたい。指揮官、戦力等については以下のとおりである。

指揮官	
ドン・フアン	アリ・パシャ
戦力	
ガレー 209 隻 ガレアス 6 隻 小ガレオン 26 隻 補助船 65 隻 兵員 22,000 砲 1800 門	ガレー 213-219 隻 ガレアス 6-12 隻 小ガレオン 60 隻 輸送船 24 隻 兵員 26,000 砲 2000 門

14) <http://www3.kct.ne.jp/~atonoyota/kindai/16-zettai2.html>

損害	
戦死者 7650? 負傷者 7785 ガレー 12 隻喪失	戦死者 5000 捕虜 25000, 漕手のキリスト教徒 12000 ガレー 25 隻沈没, ガレー 170 隻, 小型ガレオン 40 隻投降

上の数字で気になるのは、トルコ側の兵員は2万6000人なのに、戦死者が5000人で捕虜になった者が2万5000人となっている点である。損害の数は3万人であるから兵員よりも多い。また特徴的なのはトルコ側にはかつての戦闘で捕虜になったキリスト教徒の漕ぎ手が多数いたことである。敗色濃くなった場合に、このキリスト教徒の漕ぎ手が逃走する可能性は高い。

さらに軍事的に注目しなければならないのは、この記事ではキリスト教側もオスマン帝国側もガレアス船を6隻程度備えていたということである。一般的に理解されてきたことによれば、オスマン側にはガレアス船がなかった、キリスト教側のガレアス船が大砲で相手のガレー船を離れたところから攻撃し、そののち接近して白兵戦になったというのだが、トルコ側にもガレアス船があったのだろうか。しかもキリスト教連合軍側よりも多い。これはいかなる根拠に基づいた記事なのかいささか疑問が残る。

本文は次のように始まる。

「レパントの海戦（レパントのかいせん）は、1571年10月7日にギリシャのコリント湾口のレパント（Lepanto）沖での、オスマン帝国海軍と、教皇・スペイン・ヴェネツィアの連合海軍による海戦である。

スペイン王国は、支配下のジェノヴァやイタリアの諸都市、マルタ騎士団等から最大限の戦力を集めた。この海戦は西ヨーロッパ史において初めての大会戦でのオスマン軍に対する勝利であり、オスマン帝国の地中海での前進を防ぐのに役立った。レパントの海戦はガレー船で行なわれた最後の大海戦であることが知られている。」（下線部引用者）

「オスマン帝国の地中海での前進を防ぐのに役立った」との記述は、この海戦の意味をヨーロッパ側の視点からとらえていることを示している。

さらにこの海戦の背景については、次のような説明が行なわれている。

「1570年にオスマン帝国のスルタン・セリム2世によるキプロス遠征が起り、ヴェネツィア共和国は同年にキプロス防衛のためにカトリック教国の艦隊を結集させようとしたが、スペインが消極的だったため、翌年8月にファマグスタが陥落し、キプロスはオスマン領になる。」（下線部引用者）

1540年以來、トルコと良好な関係にあり、「塩とワインと綿の島」であるキプロス島、言い換えれば繁栄をもたらしていたヴェネツィアの東方貿易拠点としてのキプロス島が危機的状況に陥ったこと、ヴェネツィアは経済上の理由から可能であればオスマン・トルコ帝国との衝突は回避したいと考えていたこと、したがっていわゆる神聖同盟（2回目）への参加を渋っていたことを考慮すると、「キプロス防衛のためにカトリック教国の艦隊を結集させようとした」という説明は必ずしも正しいとは言えない。また「スペインが消極的だったため」という理由も肯けるものとは言えない。スペインが消極的であったのは、国内にモリスコ蜂起という重大な問題を抱えていたからでもある。いきなり「消極的だった」という説明では背景の説明としては不十分である。この辺の背景についてはブローデルの記述を信用することにしたい。ブローデルの説明をかいつまんで言えば、次のように言うことができる。

キプロス島はオスマン帝国とシリア、エジプトとの交通の障害であり、一方キリスト教世界の私掠船の基地、避難所であり、言い換えれば東西両世界にとって海上交通の要所であった。一方はキプロス島を確保して東地中海を自由にしたいと考え、他方は従来からの拠点を守って利益を維持したいと考えていた。

東西両陣営の攻防的となるキプロス島問題以前の両陣営の軍事的衝突や事件としては次のようなものがある。1538年9月のプレヴェザの海戦でトルコ側が勝利して以来、トルコ海軍が地中海を支配していた。1551年にはトルコがトリポリを占領、1560年にジェルバ島でキリスト教側が壊滅。しかし1565年にはマルタ島に攻撃を仕掛けるもマルタ騎士団の抵抗に遭って失敗。それでも1570年に、ブローデルによれば、「彼らトルコ人はいかなる劣等感も抱いていない」[ブローデル 1991-1995：IV-381]。

一方のスペインは、1568-69年にグラナダでモリスコが蜂起し、その結果、地中海方面の軍事行動を行なうことができない状況にあった。しかし十字軍的精神にあふれていた教皇ピウス5世の発意を受けて、まずスペインとローマ教皇庁の間で、次にスペイン、ローマ教皇庁、ヴェネツィアの間で1571年5月20日に神聖同盟が締結された。5月25日にこの同盟が正式に宣言されてから10月7日の海戦までにはほぼ4か月の期間がある。

海戦の結果についての記述は、次のとおりである。

「結果は、オスマン帝国の大敗に終わった。海戦に参加したおよそ285隻の内、210隻が拿捕され25隻が沈没、逃走が確認されたのが25隻で残る25隻も逃走したと思われる。3万人の多くが捕虜となって奴隷となるか処刑され、戦死または行方不明者も少なくなかった、ガレーの漕手となっていたキリスト教徒の奴隷12000人が解放された。

この戦闘は、西欧の軍隊がオスマン帝国に大きく勝利した最初の戦いとなり、ヨーロッパに大きな心理的影響を与えた。しかし、その後スペイン王国とヴェネツィア（原文の表記のまま、引用者）、教皇は足並みがそろわず、勝利をさらに前進させて当初の目的であるキプロス島奪還などの利益を獲得することが出来なかった。

大敗にもかかわらず、オスマン帝国は艦隊の再建に取り掛かり、6ヶ月後には大艦隊の艦装を完了した。ヴェネツィアから奪取していたキプロス島の権利を割譲させるなど、地中海における優位性を依然として維持した。しかし経験豊富な船員を大量に失ったことにより、オスマン帝国の海軍はキリスト教連合との決定的海戦を避けた」[ウィキペディア日本語版、下線部引用者]。

「概説」「図解」等の著作におけるレパントの海戦

今度は、一般読者向けの「概説」や「図解」等の著作でレパントの海戦がどのように扱われているかを見てみよう。

宮崎正勝『早わかり世界史』（日本実業出版社、1998年）では、オスマン帝国の歴史が、1299年から1922年までが「再びイスラム化の波に洗われた地中海世界」という題で、わずか2頁で要約されているので、レパントの海戦への言及はない。16世紀については、次の記述のみである。「この時代のオスマン帝国は、ハンガリーを征服し、当時イタリアをめぐる神聖ローマ帝国（ドイツ）と戦っていたフランス王と結んでウィーンを包囲して危機に陥れ、スペインなどの軍艦からなる連合艦隊を破り、地中海の制海権を確立した」[宮崎 1998：193]。この一節で言及されている「連合艦隊を破った」事件は1538年のプレヴェザの海戦を指している。同じ著者宮崎正勝『スーパービジュアル版、早わかり世界史』（日本実業出版社、2005年）にはレパントの海戦の記述がない。このことから宮崎正勝はレパントの海戦をまったく重視していないことがわかる。

『歴史読本』編集部編『総図解よくわかる世界史』（新人物往来社、2009年）では、他の事件と同じように、図版1頁、本文1頁でレパントの海戦が紹介されている。背景については次のように説明されている。

「1570年夏、ヴェネツィア共和国の東の要塞キプロス島にオスマン帝国軍が上陸、大量虐殺と掠奪の果てに制圧した。ヴェネツィアは独力での奪回は不可能と判断し、ローマ教皇ピウス5世に助けを求める。翌春には、スペイン、ヴェネツィア、教皇軍のほかマルタ騎士団などで構成する神聖同盟軍が結成された。」戦闘の結果、「オスマン帝国が約200隻を失ったが、神聖同盟軍の損失はその1割以下。神聖同盟軍は大勝利を飾った。16世紀を通してヨーロッパがオスマン帝国に勝利したのはレパントの海戦のみである。（中略）旧教徒・新教徒を問わずヨーロッパ人の自信を回復させた戦いとして長く人々に記憶されることになる」[『歴史読本』編集部編 2009：178、下線部引用者]。

「ヨーロッパ人の自信を回復させた戦い」ではあるが、「オスマン帝国は素早くダメージを回復し（中略）、キプロス奪還も叶わなかった」[同上]のである。この「ヨーロッパ人の自信を回復させた戦い」という評価は、「キリスト教国側の勝利は、非常に暗くなりそうな未来への道を遮断した」というブローデルの記述につながる言い方である。ブローデルの記述の仕方は持って回った言い方で直接的ではない。

『図解 スパッとわかる世界史』（著者は代々木ゼミナール世界史講師、佐藤幸夫。ナツメ社、2000年）は歴史上の主な出来事を年代順にそれぞれ2頁で解説している著作である。そのなかに

「1571年、スペイン王フェリペ2世、レバントの海戦でオスマン帝国を破る！」というタイトルの項目がある。そこには次のような記述が見られる。

「一方、対外面では、1571年にオスマン帝国艦隊をレバント海戦で破り、地中海制海権を奪い返し、同年フィリピンのマニラ市を占領、東方貿易の根拠地とした」[佐藤 2000:239]。

「地中海制海権を奪い返し」という記述は、上に引用したインターネットの世界史の記述とまったく同様であることに注目しておきたい。

また『図解世界史』（成美堂出版、2006年）では、「スペインの没落、続かなかったスペインの栄華」という項目のなかで、次のように書かれている。

「1571年にオスマン帝国をレバントの海戦で破り、地中海の制海権を握ると、80年には母方の血筋であったポルトガル王位を継いで、アジア貿易も支配下におさめた。これにより全世界に拠点を獲得したスペインは、「太陽の沈まぬ国」とまで呼ばれた」[『図解世界史』2006:92]。

レバントの海戦の勝利が一時的な制海権の奪取であったことは多くの歴史書が語っていることだが、この図解本ではレバントの海戦の勝利でスペインが「地中海の制海権」を握ったと断定されている。これが契機となって世界中に拠点を持つ大帝国となったというかなり楽観的な流れになっている。これらの概説書類ではレバントの海戦の詳細は省かれ、レバントの海戦の勝利でスペインが地中海の制海権を掌握し、世界制覇に向けて動き出したという見方をしているところに特徴がある。しかし実際にはオスマン・トルコ帝国は地中海の制海権を失ったわけではない。

さらに類似の見方を示している概説書をもう一冊紹介する。後藤武士『読むだけですっきりわかる世界史、近代編』（宝島社、2011年）によるレバントの海戦は、「太陽の沈まぬ国」のタイトルの付いた一節のなかで、次のように説明されている。

「フェリペ2世は1571年ギリシャ西岸のレバントにおいて、スペインを主力とするヴェネツィア・ナポリ・ジェノヴァ・教皇などの連合軍を組織、異母弟であるドン＝ファン＝デ＝アウストリアに指揮をさせ、見事にオスマン艦隊を打ち破った。これはヨーロッパ諸国にとってはオスマン帝国に対する最初の勝利で、強大なオスマン帝国はこの敗戦後も立て直しを図り、すぐに滅亡に向かったわけではないけれど、少なくとも一時的にオスマン帝国の脅威を取り除き、地中海西岸の制海権を取り戻すことには成功した。（中略）

1580年にポルトガル王位を継承したということは、（中略）ポルトガルの植民地の支配権をも継承したことになる。これによって、（中略）スペインは世界最大の版図を持つ「太陽の沈まぬ国」となった。（中略）とてつもなく広大な国土を得たフェリペ2世の統治期は間違いなくスペインの最盛期だった」[後藤 2011:130-131, 下線部引用者]。

キリスト教連合軍にナポリやジェノヴァを加えて概説書としてはかなり詳しい説明になっている。「見事にオスマン艦隊を打ち破った」という評価の加わった記述は、明らかにキリスト教側に立った書き方を示している。その意味では「少なくとも」の前に「連合軍は」または「スペイン

は」という主語を明確に示していないにもかかわらず、この文脈では「オスマン帝国の脅威を取り除き」の主語が暗示的にスペインまたは連合軍であることがわかる。「地中海西岸の制海権を取り戻す」という限定的な表現の裏には「地中海東岸」または「地中海中央部」は相変わらずトルコ側が支配していたことを暗示する結果となっている。ポルトガルの併合（1580年）がレパントの海戦のあとに続いていることからやはりスペイン最盛期の契機としてレパントの海戦をとらえていることがうかがわれるのである。

図解雑学類の最後に、岡田功『世界の歴史』（ナツメ社）の記述を読んでみると、「太陽の沈まぬ国、ハプスブルク帝国の盛衰」という頁に次のような解説が書かれている。

「フェリペ2世は新大陸から大量の金銀を移入する一方、イギリスの女王メアリ1世と結婚し、1571年にオスマン帝国をレパントの海戦で破って地中海を支配した」〔岡田 2000：112〕。

記述を簡略化するとこのようになるのだろう。これではスペインが地中海全域を支配したかのような印象を与えてしまう。しかし、東地中海においてキプロス島をオスマン帝国が相変わらず支配していたことやチュニス攻略などの歴史的事実とはいささか異なる解説になっていると言わざるを得ない。ついでに指摘しておく、周囲の反対を押し切ってイギリスの女王メアリ1世とフェリペ2世が結婚したのは1554年7月で、このときはまだスペイン国王に即位（1556年1月）していない。しかしここではあら探しをするのはやめておこう。

高校教科書の記述

高校で使用頻度の高い高校生用の世界史の教科書を一般読者向けに書き直した『もういちど読む山川世界史』（山川出版社、2009年）では、レパントの海戦は「近代初期の国際政治」の項目のなかにある「オスマン帝国とヨーロッパ」という一節に、次のように書かれている。

「宗教改革時代、オスマン帝国のスレイマン1世は、オーストリアの首都ウィーンにせまるいっぽう、北アフリカにも進出し、スペインに脅威をあたえた。スペインは、カール5世の子フェリペ2世（在位 1556-98）のとき、レパントの海戦（1571年）でオスマン帝国艦隊を破ったが、これも決定的な勝利ではなく、その後もオスマン帝国は長いあいだヨーロッパ、とりわけオーストリアにとって大きな脅威であった」〔『もういちど読む山川世界史』2009：128頁、下線部引用者〕。

ここにもレパントの海戦がスペインにとって、「決定的な勝利」ではなかったことが書かれている。しかもオスマン帝国が「オーストリアにとって大きな脅威であった」ことが強調されている。しかし脅威であり続けたことが、そのままヨーロッパ側へのさらなるオスマン帝国の進出につながったわけではないことも記憶しておくべきであろう。

トルコ史から見たレパントの海戦

ところで『興亡の世界史10 オスマン帝国』（講談社）にはそもそもレパントの海戦に関する記

述が見あたらない。このように歴史家が一行も触れることのない大海戦とはいったいどんな意味があったというのか。トルコ側には世界史的な意味がない海戦だったのだろうか。少なくともトルコ史研究者にとってレパントの海戦が大きな意味を持たないことは明らかである。

続いて三橋富治男『オスマン帝国の栄光とスレイマン大帝』（清水新書, 1984年）を繙いてみると、この著作はスレイマン大帝の死去まで、すなわち1566年までを扱っているのが当然のことながらレパントの海戦には言及していない。

次に林佳世子『オスマン帝国の時代』（山川出版社, 世界史リブレット, 1997年）を一瞥してみると気づくのは、レパントの海戦は小見出しにもなく、次のような記述があるのみである。

「混乱期～16世紀末～17世紀前半の展開（見出し）

1566年のスレイマン1世の没後、対外的には、キプロス征服の成功とレパント海戦の敗北ののちは、めだつた戦果のあがらない消耗戦が断続的に続いていた。戦争の長期化は財政を圧迫し、戦場から遠く離れたイスタンブルの人びとのうえにも暗い影を落とすはじめた」[林 1997: 31]。なお本文を補うかたちの注として「レパント海戦」について次の記述が見られる。「キプロスの喪失を受けてヨーロッパで対オスマン同盟が結成され、1571年、オスマン海軍をアドリア海のレパント沖で破った。オスマン海軍はほぼ全滅したが、1年後には新たな艦隊が再建された」[同上, 下線部引用者]。オスマン帝国の時代の一つの小さな軍事エピソードの扱いになっている。破れてもオスマン帝国全体にはほとんど影響がなかったという評価である。

今度は、同じトルコ史研究者のなかで新井政美はどのようにレパントの海戦に触れているかを見よう。

新井政美『オスマン vs ヨーロッパ, 〈トルコの脅威〉とは何か』（講談社選書メチエ, 2002年）の「スペインの落日」というタイトルの付いた節から引用する。

「本来フェリペは、「新大陸」を含む膨大な領土を持つスペインの、その「黄金時代」を父から受け継いだはずだった。「新大陸」への窓口の位置にあったセビリヤの富に、フランドル地方への羊毛輸出がもたらす利益、これらがスペインの経済を支えていたはずだった。しかし実態は、低い農業生産性と幼稚な毛織物工業とでは、浪費を続ける王室や貴族たちの支出をまかなえる道理もなく、国庫は空に近かったのである。フェリペは莫大な借款を抱え、いくどかにわたって破産を宣言せざるをえなかった。さらにさまざまな要因から生じたインフレが、「新大陸」産の銀の流入によって加速される。また潜在的に豊かな経済力を持っていたユダヤ教徒やイスラム教徒を迫害していたから、フェリペの時代にスペインの繁栄は、その基盤をほぼ切り崩されていたのだった。

まさにその時代に、レパントの海戦が戦われたのである。スレイマン亡き後のオスマン軍によってヴェネツィア領キプロスが征服されたのを契機に、ヴェネツィア、教皇、スペインの間に「神聖同盟」が結ばれ、その連合艦隊が1571年にレパント沖でオスマン艦隊を撃破した。ヨーロッパは勝利に沸いたが、しかし戦後「神聖同盟」諸国間に不和が生じ、結局73年にヴェネツィアは、オスマン帝国と単独講和を結んでキプロスを放棄するとともにオスマン政府への貢納を約し、海戦の真の勝者が誰だったかを全ヨーロッパに示すことになった。またフェリペはこの間にチュニス占拠させたが、これも74年には奪い返され、北アフリカが最終的にオスマン支配下に組み入れられた。つまり地中海は、相変わらず「オスマンの湖」だった。」[新井

2002：162-163, 下線部引用者]

スペインの「莫大な借款」の原因は王室の浪費というよりは帝国として軍事費が膨大であったことによるという見方が正しいと思われるが、レパントの海戦の前提をスペインの経済的破綻としているところに特徴のある見方であり、軍事的な勝利はヨーロッパ側であったとしても、レパントの真の勝者をオスマン帝国としているのは興味深い。戦争の前後で地中海の支配者の交替がなかったと見ているのである。このことは上の引用の「地中海は、相変わらず「オスマンの湖」だった」という記述に顕著に見られる。なお新井はブローデル『地中海』を参考文献に挙げていないので、読んだとしても引用はしていないことがわかる。

同じ著者は別の論文（「オスマン帝国とヨーロッパ」『岩波講座世界歴史 16 主権国家と啓蒙』1999年所収）でレパントの海戦について次のように書いている。

「スレイマン没後のレパントの海戦（1571年）で、オスマン帝国の海上覇権が一挙に失われたわけではないし、世紀末から10年以上にわたって続くハプスブルクとの消耗戦も一進一退であった。」[新井 1999：91]

トルコ史の専門書にはどんなふうに描かれているのか。たとえば、ロベール・マントラン、小山皓一郎訳『トルコ史』（文庫クセジュ、白水社、1982年）の記述を読んでみよう。

「キプロス島の喪失は全キリスト教世界に衝撃を与え、教皇ピウス5世は反トルコ同盟結成を提唱するが、ヴェネツィア人自身はトルコ政府への宣戦布告をなしえぬ立場にあった。フランス国王が仲裁を買って出たが、教皇とスペインはオーストリアの支持をうけ、最後にはヴェネツィアとマルタ島騎士団の参加も得て連合艦隊を送り出した（1571年5月）。この艦隊はオーストリアのドン・フアンの総指揮下に10月6日（原文のママ）コリント湾沖合でオスマン艦隊と激突した。これがレパント海戦で、3時間のうちにキリスト教軍はオスマン軍に対し決定的な勝利をかちえたが、さらに追撃を加える余力をもたず、この勝利を十分に利用しえなかった。メフメト・ソコルル・パシャが急速にトルコ艦隊を再編したのに反し、ヴェネツィア人は海戦の継続に熱意を示さなかった。」[マントラン 1982：76-77]

この本では戦闘の日付が10月6日となっていて、1日ずれている。また総指揮官は通常はドン・ファン・デ・アウストリア（フェリペ2世の異母弟）であり、別にオーストリアにいた人物ではない。この文の流れではオーストリアの支持を取り付けたと読めるので、いかにもオーストリアから指揮官がやって来たかのような誤解を与えかねない。ヴェネツィアが対トルコ戦争に乗り気ではなかったのは、東地中海、とりわけキプロス島を貿易の拠点としているヴェネツィアとしてはトルコを敵に回しては後々の貿易活動に支障が生じかねないからであった。しかしキプロス島の要塞ファマグスタをトルコに攻め落とされたことからしぶしぶ神聖同盟に参加したのである。わずか3時間でキリスト教連合軍側が勝利したこと、その後ただちにトルコ側は艦隊を再編したこと、ヴェネツィアは対トルコ戦争を継続しなかったことなどが簡潔に述べられている。そしてキリスト教側が「この勝利を十分に利用しえなかった」という記述がここでは重要だと思われる。

テレーズ・ビタール『オスマン帝国の栄光』（鈴木董監修，知の再発見双書，創元社，1995年）の記述は次のようなものだ。

「スレイマン没後も、大宰相ソコルル・メフメット・パシヤのおかげで、帝国は勢いを保ち続けた」という項目立ての中でレバントの海戦については、「大宰相の制止にもかかわらず、1571年、セリム2世はキプロス征服を企て、それがヴェネツィア、教皇ピウス5世、スペインの同盟の形成を促した。カール5世の庶子ドン・ファン・デ・アウストリアの率いる連合艦隊は、1571年10月7日、コリント湾のレバントで、大提督ムエZZイン・ザーデ・アリ・パシヤ指揮下のオスマン軍と遭遇、230隻のガレー船を擁し、数の上では優位にあったオスマン艦隊は、ドン・ファンの巧妙な用兵で、ほぼ全滅した。

勝敗そのものより、それによる心理的衝撃の方が重要だった。無敗のオスマン帝国の神話は揺らぎ、その影響は長く尾を引いた。とはいえ、この海戦の結果には相対的な意味しかなかった。1573年、ヴェネツィアとの間で締結された和平条約は、オスマン帝国のキプロス征服を容認するものだったし、再建されたオスマン艦隊は1574年、チュニス¹⁵⁾を最終的に占領した。

1579年、ソコルル・メフメット・パシヤが狂信者に暗殺された。前任者たちとは似ても似つかず、国務にまったく無関心だったムラト3世とメフメット3世の時代、23人が大宰相の地位に就いた。内乱が増え、イランのサファヴィー朝、オーストリアのハプスブルク帝国との戦争が再燃した。16世紀末は早くも帝国の凋落を告げていた。〔ビタール 1995：49-51、下線部は引用者〕

この一節は下線部「帝国は勢いを保ち続けていた」で始まり、「16世紀末は早くも帝国の凋落を告げていた」で終わっている。言い換えればオスマン帝国の凋落の傾向の契機の一つとしてレバントの海戦が扱われている。中でも「心理的衝撃」の大きさが強調されている。しかし「海戦の結果には相対的な意味しかなかった」と結論づけている。海戦でトルコ側は負けたが、海軍はすぐに再建され、その後もスペインとの小競り合いが続き、チュニス占領に至ったのである。

次に引用するのはオスマン・トルコ帝国の歴史を専門とする鈴木董の見解である。ブローデルの『地中海』出版を記念して開かれたシンポジウム『海から見た地中海』¹⁵⁾での発言の記録である。

「16世紀とりわけその後半の地中海世界についてみれば、前近代イスラム世界における最後のイスラム世界帝国というべきオスマン帝国が、そのほぼ4分の3を支配下においていた時代であった。そして海上においても、オスマン帝国は、16世紀前半に東地中海の制海権を手中に収めたのち西地中海にも手を伸ばし、西地中海における覇権をめぐる、優勢の下にハプスブルク勢力と抗争を繰り広げている時代であった。1571年のレバントの海戦における敗戦も、ブローデルが『地中海』においてこの事件を位置づけたようにオスマン帝国の地中海における覇権の終焉をもたらしたわけではなかった。レバントの海戦もまた一つのエピソードをなす、オスマン帝国とハプスブルク勢力との長年の抗争は、実は、1574年にオスマン側がチュニス

15) 鈴木董「ブローデルの『地中海』と「イスラムの海」」、川勝平太編『海から見た歴史』所収、藤原書店、1996年、33-67頁。

での支配権を最終的に確立したことによって終わりを告げたのであった。

しかし『イスラムの海』としての地中海の光輝もまた、17世紀に入り、地中海そのもののグローバルな交通と交易のネットワークのなかでの地盤沈下によって、失われていった。』[同上、65-66、下線部引用者]¹⁶⁾

同じ著者による『オスマン帝国』（講談社現代新書、1992年）では、「8 超大国の曲がり角」の冒頭「オスマン艦隊、完敗す」と題された一節でレバントの海戦がかなり詳しく論じられている。

「1571年秋、西欧キリスト教世界の人々は歓喜にわきたった。10月7日に行われたレバントの海戦で、キリスト教徒の連合艦隊が、オスマン艦隊に大勝したのである。常勝不敗に見えたオスマン軍が初めて西欧人によって打ち破られたことは、「トルコの脅威」の悪夢から、人々を解放するきっかけとなった。（中略）

参加した艦船の数も、キリスト教徒側が約278隻とやや多かったとはいえ、オスマン側も224隻ほどで、それほど劣勢ではなかった¹⁷⁾。

ところが海戦の結果、キリスト教徒側の船の損失ははなはだ軽微であったのに対し、オスマン側では、約190隻の船が、撃沈されるか拿捕された。さらに、オスマン艦隊の最高司令官であるカプダン・パシャ（大提督）のアリ・パシャまで戦死している。

後代の西欧の歴史家たちは、レバントの海戦を大々的に取りあげた。そして、オスマン帝国の没落は、この海戦とともに始まったとさえ主張することも多い。もちろんこのような西欧側からの視点は、わが国での歴史観にも大きな影響を与えている。でも、それは本当だろうか。

確かに、レバントでの敗戦は、当時のオスマン帝国の指導者たちに衝撃を与えた。しかし、この海戦の敗因は、海軍の組織や技術水準といった構造的な要因によるよりも、むしろ戦術上の誤りにあった¹⁸⁾。（中略）

とはいっても、オスマン当局者にとり、この敗戦の衝撃は、当時の西欧人にとっての戦勝の喜びとは比較にならぬほど小さいものであった。（中略）

こうして、レバントでの敗戦後8か月もたたない1572年6月初旬には、250隻からなる大艦隊を再び地中海に送り出したのであった。西欧側はレバント戦勝利後の好機を生かすこともなく、連合艦隊を解散していた。このため、あれほどの打撃を与えたはずのオスマン艦隊が再来したことに大きな衝撃をうけた。（中略）

衰退かどうかは別にしても、16世紀末頃から、オスマン帝国において何かが変わりはじめたのは事実であった。これまでめざましい勢いで進んできた領土の拡大も、停滞しはじめてる。」[鈴木 1992：236-239、下線部引用者]

トルコ側敗戦の理由を戦術上の誤りに見ていることは、しばしばこの戦闘があらかじめわかっていた場所で起きたのではなく、ほとんど「遭遇」に近い形で始まったと言われていることに通じる

16) のちに鈴木董『オスマン帝国とイスラム世界』、東京大学出版会、1997年、38-39頁に再録。

17) 艦船の数は研究書によりさまざまであり、一般にはオスマン側が数の上では多いと言われるが、鈴木董はキリスト教側を多く見積もっている。

18) 鈴木董は海戦については「素人にすぎなかった」アリ・パシャの強硬な正面からの海戦が大敗の原因であったと分析している。

が、戦術上の誤りを指摘する歴史家はそれほど多くないのも事実である。またキリスト教側がこの戦勝を生かし切れなかったのは、むしろスペインの国際政治の関心が大西洋に向いていたからでもある。オランダの独立問題、国内のモリスコ問題等を抱えていたスペインとしては地中海に戦力を集中することはもはやできない状況にあったのである。そしてオスマン帝国側の領土拡大という観点からすると、鈴木董の指摘しているとおり、拡大ではなく「停滞」せざるをえない状況にあった。東方のアナトリアでの「ジェラーリーの反乱」があり、ペルシャ問題があったから、オスマン帝国はもはや西方に軍勢力を割く余裕がなくなっていたのである。

スペイン史のなかでのレパントの海戦

『概説スペイン史』（立石博高、若松隆編、有斐閣選書、1987年）での扱いはどうか。

「フェリペ2世の治世」の「国際政治の面では」フランスとの争い（1557年、サン・カンタン、1558年グラヴリース）に勝利する一方、「1570年にヴェネツィアからキプロス島を奪取し、マルタ島をも攻撃したオスマン・トルコに対抗して、教皇、ヴェネツィアとともに神聖同盟を結成し、1571年のレパントの海戦でトルコ艦隊を撃滅し、地中海でのイスラムの脅威を除去した」[立石 1987: 45]。

「地中海でのイスラムの脅威を除去した」という簡潔な解説になっているが、レパントの海戦後もチュニス占領をめぐる小競り合いが続いたことを考慮すると、この解説はもっぱらスペイン側の視点に立っていると言わざるを得ない。

J・H・エリオット『スペイン帝国の興亡 1469-1716』ではレパントの海戦は「第6章 人種と宗教」のなかの「戦う信仰と勝利の信仰」に登場する。次のような文脈においてである。

「(モリスコによる)グラナダの暴動は都合のよいときに鎮圧された。トルコの艦隊は、ふたたび地中海を我が物顔に巡航するようになっていた。当時、スペイン、ヴェネツィアおよびローマ教皇とのあいだで、神聖同盟を設立するための準備が行われていたが、その時期の1570年から1571年にかけて、情勢は非常に緊迫してきたように思われたので、フェリペは、実際にバレアレス諸島からの避難を命令した。(中略)神聖同盟の艦隊は、グラナダで勝利を収めたばかりのドン・ファン・デ・アウストリアの指揮の下に、1571年9月に最終的にメッシーナに集結した。艦隊は、ギリシャ海域に向けて出航し、10月7日に、レパントでオスマン＝トルコの艦隊に壊滅的な打撃を与えた。そのおかげで、バレアレス諸島ばかりでなく、西地中海全体が、最終的にイスラムの脅威から救われることになったのである。

1571年のレパントにおけるキリスト教軍の劇的な勝利は、当時の人々にとって、イスラム教徒に対する十字軍活動のなかで、もっとも輝かしい出来事の典型として考えられるようになった。(中略)だが、実際には、レパントの戦いはまったく見せかけの勝利であったといえる。そのために、この勝利の余勢をかってさらに進撃しようとする企ては、完全に失敗に終わった。ドン・ファンは1573年にチュニスを占領したが、翌年にはふたたび奪回された。オスマン＝

トルコとスペインの戦いは、行き詰まり状態のまま、次第に下火になっていった。

(中略) レバントの海戦以後、オスマン帝国は、徐々に反攻に転じていったために、スペインはさらに大規模な準備をする必要が生じた。すでに1572年頃には、スペインは、地中海において全面戦争をする余裕があるかどうか非常に疑わしくなっていた。なぜならば、その年の4月1日に、オランダの「海の乞食団」がブリルの港を占領したことにより、ネーデルランドの叛乱がほとんど鎮圧不可能な状況となったことがはっきりしてきたからである。

それゆえに、地中海からの撤退は、スペインにとって明らかに好都合であったし、幸いなことに、トルコ人もまた問題をかかえていたので、両者は暗黙の了解に達することができた。半世紀にわたって対峙してきた二大帝国は、徐々にその兵力を撤退させていった。トルコ人は彼らの敵ペルシャに対処するためにその兵力を東方に動かし、スペイン人は新しい大西洋の戦場に向けてその兵力を西方に動かした。長期間にわたってスペインの生活を左右していたイスラム世界からの危険は、ついに遠のいた。スペインは、1570年代と80年代には身軽になり、ますます深刻な様相を呈してきた北方のプロテスタント勢力のもたらす脅威にその関心を集中することが可能となったのである。」[エリオット 2009：269-271、下線部引用者]

エリオットの見方は、レバントの海戦の勝利は、キリスト教世界の人々にとっては「イスラム教徒に対する十字軍活動のなかで、もっとも輝かしい出来事の典型として考えられる」といいながらも、「実際には、レバントの戦いはまったく見せかけの勝利であった」というものである。チュニス占領をめぐるオスマン帝国とスペイン帝国の両者はその後も小競り合いを繰り返しながらも、大規模な戦闘は起こらず、「両者が暗黙の了解」に達したのは、それぞれ東方と北方での国際政治に集中しなければならない状況にあったからで、地中海を舞台とするイスラム対キリスト教の戦いはなくなったのである。

いわゆる「世界史」の通史での扱われ方

『ヨーロッパの歴史—欧州共通教科書』（東京書籍、1994年、原著1992年）におけるレバントの海戦の扱いはどうなっているか。

レバントの海戦に関する本書での最初の記述は、次のようなものだ。

「オスマン・トルコは、16世紀後半をとおして、正確には1571年のレバント（ギリシア西岸、ナフパクトス）の海戦まで、ヨーロッパにとって最大の脅威として存在していた。」 [『ヨーロッパの歴史—欧州共通教科書』、1994：227、下線部引用者]

また「宗教戦争によるヨーロッパ分裂」の章の「フェリペ2世のカトリック擁護」という一節のなかでレバントの海戦を描いたヴェロネーゼの絵の解説として、次のような説明文がある。

「1571年10月、コリントス湾入り口のレバントの海戦で、神聖同盟（スペイン、ヴェネツィア、ピウス5世）の連合艦隊はトルコ艦隊を打ち破り、オスマン帝国の不敗神話に終止符を打った。」 [同上、240]

同じ頁の囲み記事には「ミゲル・セルビア、レパントの海戦の証人」という題で、次のような引用がある。

「ウルジャ・アリアは自軍の形勢不利と見るや、退却を試み、5隻のガレー船とともに逃走した。これこそ、最も規模が大きく、最も激しく、最も多くの血が流された戦いであった。

キリスト教徒の勝利が告げられるまでに1時間半かかった。これを知ると、多くのトルコ兵は大慌てで接岸しようとし、ガレー船を乗り捨て、逃げのびる者もいた。240隻あまりの船が破損し、さらにそれ以上が沈没あるいは炎上した。

戦闘は午前11時から午後5時まで続いた。(中略)次にトルコ軍のガレー船と捕虜が分配された。結局、6000人のトルコ人が捕らえられ、戦死者は3万人以上にのぼった。船員名簿によれば、トルコ軍兵士の数は5万6000人であるから、残りは岸にたどり着いたり、無傷のガレー船に乗って逃走したことになる。我が方の損害は、死者負傷者あわせて約1万2000人であった。」
[同上]

さて本文ではごく短く、次のような解説が書かれている。

「1568年に各地で急激な情勢の転換が生じた。ネーデルラント北部で、カルヴァン派の宗教改革が根をおろした。スペイン南部では、モリスコ人(キリスト教徒に改宗したムーア人)が蜂起し、一方、トルコ人が再び攻勢を開始し、これまでヴェネツィア人が抑えていたキプロス島を奪ったのである。

フェリペ2世は、まず地中海の戦線で反撃に打って出た。1571年レパントの海戦で、スペイン、ヴェネツィア、ローマからなる神聖同盟軍はトルコ艦隊に勝利した。

トルコの脅威が除かれると、フェリペ2世は英仏の強力な支援を受けるネーデルラントとの和解を試みた。そして、フェリペ2世はイギリスへ侵攻する決意を固めた。」[同上]

1990年代のヨーロッパ共同体が作成した欧州共通教科書としては、事実を淡々と述べる公平な記述をしていて、ほとんど感情移入のない教科書となっている。

プランタジネット・S・フライ『パノラマ世界の歴史』(樺山紘一監訳、講談社、1996年)では、「1571年 レパントの海戦で、オスマン艦隊が敗れる」という項目で、次のように書かれている。

「16世紀に入ると、地中海の重要な交易路や都市の支配権をめぐる、オスマン帝国とキリスト教勢力は戦いをくりかえしていた。ローマ教皇はヴェネツィアやスペインと同盟を結び、オスマン帝国に対抗しようとし、スペイン国王フェリペ2世は異母弟であるドン・ファン・デアウストリアに、約200隻の艦隊の総指揮権を与えた。これに対して、オスマン帝国艦隊は約230隻。ついに1571年10月7日、ギリシャのコリント付近のレパント湾で、両軍は激しい戦闘に入り、約3時間後、オスマン軍は大提督を失って敗走した。この大勝で、キリスト教陣営は大きな自信をもつことになる。」[フライ 1996: 195, 下線部引用者]

補足すれば、この著作ではキリスト教陣営の大きな自信のその後については言及がない。

J・M・ロバーツ『図説 世界の歴史』6、「近代ヨーロッパ文明の成立」（創元社，2003年）では、次のような記述になっている。

「この時代、繁栄を謳歌していたのは、おそらくオスマン帝国だけだったといえるでしょう。東地中海の海上で長くオスマン帝国と対峙していたヴェネツィア共和国は、すでに崩壊が始まっており、カール五世と息子のフェリペ二世は、ともにアフリカでの軍事行動で失敗しました。1571年の有名なレパントの海戦も、そのオスマン帝国に対する勝利はあくまで一時的なものにすぎず、3年後にはオスマン帝国がスペインからチュニスを取りもどしているのです。オスマン帝国との抗争とイタリア戦争は、アメリカの銀がスペインに流入していたとはいえ、カール五世にとって重い財政的な負担となっていました。本国では方向転換が切実に求められており、結局カール五世は「キリスト教世界の団結」をなしとげられないまま、舞台を去ることになったのです。」[ロバーツ 2003：124]

この著作でも「オスマン帝国に対する勝利はあくまで一時的なものにすぎず」と言われている。1574年のオスマン帝国によるチュニス奪還があるからである。ついでに、この文脈の中で軍事費の増大がカール5世にとって重い財政的負担となっていたことが述べられているが、スペインへの銀の流入の時代、およびレパントの海戦の時代、スペインの国王はすでに息子のフェリペ2世なのだから、主役はカール5世ではなく、フェリペ2世のはずである。その意味ではやや不正確な記述である。

最近ベストセラーとなっているウィリアム・H・マクニール『世界史』（下）（中公文庫，2008年）の「イスラムの領域およびキリスト教の社会，1500-1700年」の章では、レパントの海戦はその名では登場しない。しかしイスラムの勢力、すなわちオスマン帝国のヨーロッパ進出は次のような文脈で記されている。

「イスラムの勢力（つまりオスマン帝国，引用者）は、キリスト教を侵しながら前進した。1543年までに、ハンガリーの大部分はトルコの行政下に入った。その後もくりかえし国境地帯での戦争がつづき、1683年まで、ポーランドおよびオーストリアのハプスブルクに対するトルコ人の戦いは有利に展開した。ヨーロッパ人に対するオスマンの軍事的な劣勢は、トルコ人の第2回ヴィーン包囲にはじまり、ハンガリーの大部分がオスマンからオーストリア人の手にうつった1683年から1699年までの長い戦争の間に明らかになった。」[マクニール 2008：96-98]

このような記述のなかでレパントの海戦については、きわめて短い解説が加えられる。

「地中海およびインド洋の両方で、スペイン、ポルトガルの艦隊が、イスラムの海上勢力に挑戦し、いくつかの重要な戦い¹⁹⁾で勝利をおさめた。しかしこのイベリア両国の海軍力は、イスラムの船隊を海上から駆逐することができるほど大きくはなかった。そこで、1571年に、

19) 具体的には明示されていない。

一連の長い地中海における闘争に終止符が打たれたときにも、トルコの海軍力は、1511年にその戦いがはじまったとき同様の力を維持していた。」[マクニール 2008:99, 下線部引用者]

この引用文に見られるのは、レバントの海戦の敗北はトルコの軍事力にほとんど影響を与えなかったということである。

湯浅赳夫『世界地図で読む五大帝国の興亡』（日本文芸社、2001年）では「ヨーロッパを脅かすオスマン・トルコの領土野望の挫折」においてレバントの海戦が登場する。次のような書き出しである。

「16世紀より西ヨーロッパ人の世界ができたことは間違いない。しかし、アジアを完全に支配するのは産業革命以後のことではない。15世紀の末にポルトガルやスペインがアフリカ、アジア、アメリカに進出していったが、これは単に前進したということとともに、オスマン・トルコに追われたという側面があることを忘れてはならない。（中略）バルカン半島を席卷して、ハンガリアの大半を占領し、ハプスブルグ帝国と衝突するのみならず、モロッコを除いて北アフリカを領土に加え、地中海ではヴェネツィアやジェノアの海軍と張り合っていた。（中略）1538年のプレヴェザの海戦。オスマン海軍はスペイン、ヴェネツィア、ローマ教皇の連合艦隊を撃破し、クレタとマルタを除く全地中海水域を制圧した。このトルコの攻撃に歯止めをかけることに成功したのは、1571年のレバントウの海戦である。（中略）ヨーロッパ側はこの海戦でオスマン・トルコに勝つことができた。これでオスマン海軍の全盛期は終わったが、なお陸軍は1683年、再度ウィーン包囲攻撃をする力量を持っていたのである。（中略）1699年のカルロウィッツ条約以後、この帝国より活力は失われた。こうして、イスラム文明の最後の輝きは消えてゆくのである。」[湯浅 2001:182-183, 下線部引用者]

同書では、レバントの海戦敗戦をオスマン海軍全盛期の終わりと見ているが、オスマン・トルコの衰退は17世紀と断定している。17世紀にウィーン包囲はするが、ついにオーストリアを滅ぼすに至らず、ヨーロッパ側への前進をすることはかなわなかったのである。

樺山紘一『世界の歴史』第16巻、「ルネサンスと地中海」（中央公論社、1996年）では、レバントの海戦への言及は8カ所に及ぶ。なかでも「地中海もまた再編へ」と題された一節は269頁から274頁にわたりレバントの海戦に関する記述はかなり長い。以下、要約的にその記述を紹介する。

「西方の人びとは、オスマン帝国の巨大な影におびえつつ、これとの応接においまくられた」と始まるオスマン帝国のターゲットは、ひとつは、北アフリカ、もうひとつは、バルカン半島である。1529年、オスマンは「ウィーンを落城寸前にまでおとし入れる。こうして、東地中海をとりまく全域は、オスマンの地に転じた。（中略）1538年になって、危機感をつのらせた教皇が、海軍の結集を呼びかけた。拒否した国もあったが、ヴェネツィアとスペインに教皇庁領の軍隊が加わった。キリスト教世界最強の連合艦隊である。」これがプレヴェザの海戦となり、「オスマン軍の勝利におわった。東地中海の制海権がオスマン側にあることは、いまや疑いのない事実となった。」その後、オスマン帝国はイタリア半島の入り口にある、つまりヴェネツィアの交易路としてアドリア海の入る入り口であるオトラントを占領し、1570年にヴェネツィア領のキプロスが陥落した。この「ふたた

びの危機」を契機に、「ローマ教皇は全カトリック世界に号令を発した。連合軍による対抗を要請したのである。これに応じたのは、またしてもヴェネツィアとスペインだけであった。今回は、北アフリカのオスマン勢力に脅威を感じたスペイン帝国が本腰をいれた。」こうしてオスマン帝国とキリスト教連合軍がレバント沖で「遭遇した」のである。両軍共にどこで戦闘になるかが決まっていたわけではないので、「遭遇」という言い方がされる。戦力については「キリスト教側は戦艦203隻、オスマン側は230隻。戦力と戦意はほぼ互角」と記されている。「海戦は一日で、決着がついた。(中略)レバントの海戦は、キリスト教側にとって、ほとんど最初の完勝である。」

戦闘の結果についての記述は、次のとおりである。

「レバントの勝利は、キリスト教側にとっては、またとない激励であった。連敗からくる劣等感を払拭するには、絶好の機会となった。もっとも、敗れたオスマン帝国は、さして痛痒を感じなかったかもしれない。たかだか西方の辺境で、不首尾を演じただけのことだったろうから。敗戦のすぐあとには、態勢をたてなおしたスルタン・セリム2世は、こんどはチュニジア攻略に向かい、介入したスペイン軍に雪辱をなしとげる。力は五分五分となった。しばらくのあいだ、地中海の勢力配置はほぼ均衡し、大規模な戦闘はおきない。」[樺山 2008：270-274, 下線部引用者]

キリスト教側の「劣等感を払拭」という言い方は、ブローデル『地中海』の記述（「暗くなりそうな未来への道を遮断」）を思い起こさせる。

結論に代えて

1571年のレバントの海戦に敗北したオスマン・トルコ帝国は翌年には海軍を再建し、1535年以来スペインの占領していたチュニスに1574年にオスマン帝国が攻略してから「しばらくのあいだ、地中海の勢力配置はほぼ均衡し、大規模な戦闘はおきない。」[同上, 下線部引用者] たしかに、そのとおりであり、小競り合いは時々続いたものの、その後の世界史上のオスマン帝国の勢力図から見ても、ほぼ450年にわたりオスマン帝国は、1570年代のヨーロッパ側支配圏をハンガリー平原以北に拡大することはなかったし、北アフリカで言えばアルジェリアを超えてスペインに侵入することはなかったのである。その意味では、レバントの海戦でヨーロッパ側はオスマン帝国によるヨーロッパ侵入を食い止めたのだと言っても過言ではない。

また1571年のレバントの海戦のキリスト教連合軍側の勝利はさまざまな図版やパンフレットなどに複製され²⁰⁾、現代になっても歴史ドキュメントなどのテレビ放送でもどちらかと言えばキリスト教対イスラムの文明的対立を強調し、ヨーロッパ側の栄光の記憶として記録されがちであるが、トルコ側では国際関係の視点からはほとんど無視されているという特徴がある。ブローデルはこれに関連して「奇妙なことがひとつある」と言っている。それは「レバントの海戦が何の役にも立たなかった一方、チュニスにおけるトルコの勝利もやはり決定的に重要なものではなかった」[ブローデル 1991-1995：IV-442]ということである。

20) Allesandro Barbero, 前掲書参照。

ブローデルの総括の結論部分に注目してみよう。「レバントの海戦の3、4年後に経済情勢は好転し、回復に向かう。キリスト教徒とイスラム教徒は互いに背を向け合う。」[ブローデル 2004: 393, 下線部引用者]そして『地中海』の記述によれば、「敵同士が互いに相手を構わなくなったからこそ、平和が（中略）成立したのだ。」[ブローデル 1991-1995: IV-443] 経済情勢の詳細な説明はないが、二つの勢力の対立と無関心の要因に経済情勢を付け加えているところにブローデルの特徴が見られる。同じ「総括」のなかで示される「聖なる戦いは、それが十字軍であれジハードであれ、つねに景気後退の時期に位置している」[ブローデル 2004: 393]というブローデルの見方（戦争と経済）は、事件史中心の歴史を書く人にはほとんど見られない。

さらに言えば、レバントの海戦を境にして地中海地域ではその後大規模な衝突が起きなかったということは、キリスト教側にとってもイスラム側にとっても地中海が世界の経済・政治の中心ではなくなり、それぞれ大西洋と中近東へと関心を移さざるを得なかったという歴史の必然性が理解できるというものだ。

参考文献リスト

【邦文】

- 新井政美 1999 「オスマン帝国とヨーロッパ」『岩波講座世界歴史 16 主権国家と啓蒙』岩波書店。
- 新井政美 2002 『オスマン vs ヨーロッパ、〈トルコの脅威〉とは何か』講談社選書メチエ。
- 岡田功 2000 『世界の歴史』（図解雑学）ナツメ社。
- 樺山紘一編 1989 『現代歴史学の名著』中公新書。
- 樺山紘一 1996 『世界の歴史』第16巻、「ルネサンスと地中海」中央公論社。
- 川勝平太 2007 「経済学 名著と現代 ブローデル『地中海』」, 日本経済新聞 2007年6月18日から27日まで8回連載（のちに『経済学 名著と現代』2章「ブローデル『地中海』」, 日本経済新聞社, 2007年に収録）。
- 草光俊雄, 河原温 2009 『ヨーロッパの歴史と文化—中世から近代』放送大学教材, 放送大学教育振興会。
- 後藤武士 2011 『読むだけですっきりわかる世界史, 近代編』宝島社。
- 佐藤幸夫 2000 『図解 スパッとわかる世界史』ナツメ社。
- 塩野七生 1991 『レバントの海戦』新潮社。
- 鈴木董 1992 『オスマン帝国』, 講談社現代新書。
- 鈴木董 1996 「ブローデルの『地中海』と「イスラムの海」」, 川勝平太編『海から見た歴史』所収, 藤原書店。
- 鈴木董 1997 『オスマン帝国とイスラム世界』東京大学出版会。
- 世界戦史研究会 2011 『海戦』新紀元社。
- 立石博高, 若松隆編 1987 『概説スペイン史』有斐閣選書。
- 浜名優美 2000 「グローバルな思想家としてのブローデル」『ブローデル『地中海』入門』藤原書店。
- 林佳世子 1997 『オスマン帝国の時代』山川出版社, 世界史リブレット。
- 宮崎正勝 1998 『早わかり世界史』日本実業出版社。
- 宮崎正勝 2005 『スーパービジュアル版, 早わかり世界史』日本実業出版社。
- 山内昌之 2007 『歴史学の名著 30』ちくま新書。
- 湯浅赳夫 2001 『世界地図で読む五大帝国の興亡』日本文芸社。
- 『歴史読本』編集部編 2009 『総図解よくわかる世界史』新人物往来社。
- 『図解世界史』成美堂出版, 2006。
- 『ヨーロッパの歴史—欧州共通教科書』東京書籍, 1994。
- 『もういちど読む山川世界史』山川出版社, 2009。

【翻訳】

- エリオット, J・H 2009『スペイン帝国の興亡 146-1716』（藤田一成訳）岩波書店, 岩波モダンクラシックス。
- ジェフリー, リーガン 2008『決戦の世界史』（森本哲朗監修）原書房。
- ビタール, テレーズ 1995『オスマン帝国の栄光』（鈴木董監修）知の再発見双書, 創元社。
- フライ, プランタジネット・S 1996『パノラマ世界の歴史』（樺山紘一監訳）講談社。
- ブローデル, フェルナン 1991-1995『地中海 I-V』（浜名優美訳）藤原書店,（普及版 2004年）。
- ブローデル, フェルナン 2004『ブローデル歴史集成, I 地中海をめぐる』（浜名優美監訳）藤原書店。
- マクニール, ウィリアム・H 2008『世界史』下（増田義郎, 佐々木昭夫訳）中公文庫。
- マントラン, ロベール 1982『トルコ史』（小山皓一郎訳）文庫クセジュ, 白水社。
- ロバーツ, J・M 2003『図説 世界の歴史』6, 「近代ヨーロッパ文明の成立」（鈴木董監修）創元社。
- ヨルゲンセン, クリステルほか 2010『戦闘技術の歴史 3 近世編』（浅野明監修）創元社。

【フランス語】

- Barbero, Alessandro, 2012 *La Bataille des trois empires – Lépante, 1571*, Flammarion, 679 p.（イタリア語の初版は2010年）
- Voltaire, 1878 *Essai sur les mœurs et l'esprit des Nations*, in *Oeuvres Complètes de Voltaire*, 12, Nouvelle Edition, Garnier Frères, pp. 451-454.

【インターネット資料】

- <http://www3.kct.ne.jp/~atonoyota/kindai/16-zettai2.html> (last accessed: 09/09/2014)
- ウィキペディア（日本語版）。[Ja.wikipedia.org/](http://ja.wikipedia.org/) レバントの海戦 (last accessed: 09/09/2014)